

優の住む街には装光妖精が 2 人いる。  
1 人はもちろん、装光妖精ルクスルナこと望月優だ。  
もう 1 人は装光妖精ソルライト。正体は優の友達でクラスメイトでもある日之宮あさひだ。  
なぜ同じ地域に 2 人いるのか。それはライフマテリアが昼夜問わず現れるから。  
ソルライトが昼担当ならルクスルナは夜担当というわけだ。

「.....」

優は勉強机でノートを広げ、授業の復習をしていた。  
夜の戦いに赴く関係で昼間の学校は眠くなりがちだった。敵・ライフマテリアへの警戒も兼ねて遅れは夜に取り戻しているのだ。  
ライフマテリアが来てもすぐ動けるように、学校指定の黒いセーラー服も着ている。  
もくもくと勉強する優の表情と口は静かなものの、彼女の部屋の模様はうるさかった。  
なかばアイドルめいた人気のあるソルライトのポスター、フィギュアなど、装光妖精ソルライトのグッズが見渡す限りに広がる。  
ただ、優がソルライトのグッズを集めているのは“ソルライト”という姿が好きだからではない。  
優は日之宮あさひというクラスメイトが好きなのだ。あさひの一面だから、ソルライトも好きなのだ。  
あさひは無表情でわかりにくいと言われた自分の表情を読み取って、気にかけてくれる。それが嬉しかった。  
少なくとも優にとって、日之宮あさひが 1 番好きな人なのだ。  
だから、あさひの日常を守りたい。  
正義感というものはあまり持たない優が装光妖精として戦うのはほとんどそんな理由だった。  
ちらりと、机の上に飾ってある写真立てを見た、その写真には優とあさひと一緒に写っている。

「.....！」

気配が優を叩いた。  
それはライフマテリアの邪悪な気配。  
優が窓を開けると夜の空は星々の輝きを失い暗黒に充ちていた。  
自分と友達の、あさひの住む街の平和を脅かすものが現れたのなら、装光妖精は戦わなければならない。  
だから優はこう唱えた。

「装光」

そのワードとともに優が来ていたセーラー服が水色の光の粒子へと変化する。  
さらに粒子が衣装を形作る。  
黒いショーツが乙女のデルタゾーンを覆い隠した。網目模様のインナースーツがヘソ下と肩までを覆う。  
網目模様のグローブの上には忍者装束を思わせる手甲。足に現れる足袋も同様、忍者装束を連想させた。

プリーツスカートが茶色の革のベルトでしっかり固定され、さらにベルトにも愛用の光剣を納めた鞘がくくりつけられる。

セーラー服の黒地は元の形を取り戻しつつ各所に水色のエネルギーラインを走らせる。

髪は元の色の通りのあでやかな黒色で、青色の花のようなシュシュが後ろでポニーテールにまとめる。

瞳の黒目は青く染まった。胸の前に青いクリスタルが現れ、コスチュームの光るラインの終着点に鎮座する。

さらにクリスタルに青いスカーフタイが通されて、優は、いや、装光妖精ルクスルナはぎゅっと下に引っ張った。

「装光妖精ルクスルナ、見参」

ルクスルナは友達との平和を脅かすものを討つため、夜を駆けた。

気配のありかは、木々生い茂る公園。先日ルクスルナが人形兵と戦った場所。ソルライト、あさひも今日の戦場だったとメールで伝えてくれた。

公園には白いライフマテリアの少女・シェイともう1体の植物の根っこが集まったような異形がいた。

「ルナ。今日も来てくれたね」

「あなたのためではありませんけどね」

「ふふ、つれない。遊び相手の玩具ももっと面白くしてあげたのに」

「面白く……」

「遊んであげて、プラント」

シェイは根っこの怪物にそう呼び掛けてけしかけた。

プラントと呼ばれた根っこの怪物は、自らの身体のいくつかを槍のように見立て、ルクスルナに向かって放った。

確かに速度が速い攻撃。しかしルクスルナは跳躍し、低めに宙をとんで根っこの槍を躲した。

槍が地面を抉る。優は残った胴にあたる部分に着地し、そのままその上を伝い、プラントに向けて走った。

「ルナ。カッコいい」

敵であるはずのルクスルナにシェイはどこか見惚れているようだった。

その間にもルクスルナは根の元となる怪人への距離を詰めて、ついには自身の間合いに納める。

再び跳躍し、青い光剣を抜刀。その刃が振り下ろされる。はずだった。

「えっ？」

ぐい、となにかが首筋と手首に巻き付いた。

それがなにかを判別する間もなくルクスルナの身体は後方に引っ張られた。

「がはっ！」

首筋と手首への強い圧迫感を与えられながら、ルクスルナの身体が地面に叩きつけられる。

その衝撃は凄まじく、ルクスルナの肺から空気が声となって漏れた。

地面に身体を縫い付けられるような感覚。その感覚を与えているのがさきほど地面を挟み、気づかないうちに這い出ていた根っこだとうやく理解した。

「油断、しましたっ」

腕を伸ばそうにも根の力は強く、拘束が解けない。

首もギリギリと強い力で絞められて、息が苦しい。

危機的な状況に陥ったルクスルナにシェイが語り掛けた。

「ルナ。カッコいいところもいいけど可愛いところもみせてほしいな」

「どんな表情が可愛いかな、よくっ、わからないですね」

「教えてあげる。人が可愛い顔をするのに必要なのはひとつは苦痛」

ひゅんっ、とまた別の根が勢いよくルナの下腹部を叩いた。

重く鋭い一撃が少女の柔らかなお腹を殴打する。

「ごはっ!？」

面状の激しい衝撃を受けて、ルクスルナが唾液混じりの悲鳴をあげた。

さらに根っこはまた繰り返すように同じ個所を叩く。

「かふっ!!」

二度目の痛打で、ルクスルナのポーカークフェイスだった顔が苦悶に歪んでいく。

さらにそれに留まらず根っこは執拗に、鞭打ちのごとくルクスルナを痛めつけた。

三度、四度、さらに。

「あ.....あう.....」

殴打が十といくつかを越えただろうか。

幾度となく非情の植物鞭で痛めつけられて、八の字の眉で弱弱しい表情を晒すルクスルナ。

その顔を見て、シェイの興奮が高まった。

「ルナ。とっても可愛い」

「それは、どうも.....」

頼りない表情を見せつつもルナは言葉の上では強がってみせた。

どんなに劣勢でも気持ちを強く持たなければならないことを幼い戦士は知っていた。

弱った心は悪につけこまれる隙になるからだ。

「意地っ張り。そんなところもルナのいいところ。次は、もうひとつの可愛いお顔、見せて？」

シェイはプラントの身体を優しく撫でた。

それが合図だったのか、プラントの方から根っこ触手がルクスルナめがけて飛んで来た。

狙いは妖精の小さな桃色の唇の中。  
植物の根そのものな触手がルクスルナの口を目指した。

「んぷっ！？ んううう！！」

根っこはルクスルナの唇に触れた次の瞬間、それをこじあけて口内へと侵入した。  
舌を通りこして喉奥まで侵入する異物。  
あまりの苦しさ・圧迫感に、ルクスルナの口から大粒の涙がこぼれおちる。  
さらに口内の異物はドクンと脈動した。それはなにかを吐き出す合図。  
根っこ触手は戦士妖精の喉奥に向けて甘くねばねばした液体を発射した。

「んうううう！！」

無理やり流し込まれる液体に目を見開くルクスルナ。根っこに蓋をされていなければ絶叫が漏れていただろう。

絶叫は漏れることなく、喉奥へと流し込まれていく甘い味の液体。  
それは吐き出すことも許されずルクスルナは得体の知れない液体を飲み込み続けるしかなかった。  
根っこの蓋が役目を終えたのか、ルクスルナの口からずるりと引き抜かれた。

「んはあっ！ はっ、はっ……」

塞がれていた呼吸の通り道が開かれて、大きく息を整えるルクスルナ。  
口内を蹂躪していたその根触手は引き抜かれたものの体力の消耗が激しい。  
ルクスルナはすでに肩を上下させて息をしている状態。  
万全とは言い難い。  
さらに事態は悪い方へ向かっていた。

「うあっ！？ は、はなして」

ルクスルナが打撃や口内圧迫を受けている間に足にも他の根が絡みついていた。  
もともと手を拘束していたものも合わせて四肢にまとわりついた根は高度をあげ、ルクスルナの身体を宙に浮かせた。  
手首は左右でクロスした状態で拘束され、足は赤ちゃんがおしっこをさせられる時のようにM字に開脚させられていた。  
屈辱的な体勢が、ルクスルナの恥じらいを煽る。  
さらに別の根が、妖精を辱めるためにルクスルナに迫る。迫ったその根は、ルクスルナのコスチュームにひっかかるとその一部を破り始めた。

「きゃあっ！」

ルクスルナが自身を守るコスチュームを引き裂かれて、短く可愛らしい悲鳴をあげる。  
胸の乳首のあたりと、女の子の大事なところがある股間。  
そこを保護していた部分をむしり取られ、外気に晒されたのだ。悲鳴をあげるなという方が無理な話だった。

「やっぱり、綺麗。あと、そろそろ」

「そろそろ？ っ！！」

シェイの言葉が理解できずにいると、ドクン、とルクスルナの心臓の鼓動が早まった。

それを合図に、身体が火照るような熱を持ち始める。

じわりと、汗が肌から噴き出てコスチュームを濡らした。また股間の割れ目からは汗でない液体も混じってその周囲をじっとりと濡らしていた。

「プラントは女の子を気持ちよくする蜜を出すの」

「み.....っ」

心当たりがあった。さきほど喉奥にぶちまけられた蜜というにはあまりに大量の液体。

しかしあれは甘い味がした。

「ひゃっ」

さらに糸のように細い触手が露わになった2つの乳首にまとわりつく。

同様、割れ目の上にある陰核もぎゅっと細い糸がつまんだ。

「ひうううう！？」

びくり、とルクスルナの身体が震えた。

性の3つ豆を刺激されて、ルクスルナから悲鳴のような嬌声が漏れた。

それをまた絞り出そうとするかのように、きゅっ、きゅっと糸触手はルクスルナの性的突起をしごきあげる。

その度にガクガクとルクスルナの幼い身体が揺れた。

「ひあっ、ひう、はうう！」

次第に根触手のしごきは加速していき、ルクスルナから漏れる悲鳴も小刻みなものになる。

そして。

「はあうううう！？」

ひと際大きなはじける感覚。

ルクスルナの脳天を衝撃が叩き、彼女の身体はイキ潮をばらまいて絶頂を決めた。

腰はびくんびくんと跳ねて、空中に固定されている状態がその動きの輪郭をはっきり写した。

舌を外気にさらけ出し、肩で息をするルクスルナ。潤んだ瞳と合わせて、無様なイキ顔を晒していた。

さらに絶頂を迎えて弛緩した身体は膀胱の締りを緩めてしまった。

ちょろろろろろ。

ルクスルナの股間から出る黄金水が弧を描き、地面にあるプラントの根を濡らした。

そのさまは植物に水を与えるじょうろのようだった。

「う.....うう.....」

「やっぱり。女の子は、気持ちよくなった顔が1番可愛い」

無様にイキ顔を晒すルクスルナをシェイは満足気に眺めていた。  
まるで、その顔が一番だとも言いたげに、うっとり。

その間に、プラントの根っこに変化が起こった。  
急激に葉が生えて、さらにはその間に伸びる莖の先で、白い花をパッと咲かせたのだ。  
そしてその白く美しい花はルクスルナの鼻先に添えられ、ぽふんと粉をばらまいた。

「~~~~~っ!？」

先ほどの蜜のように甘く、空気を黄色に染めるほど濃い粉。  
その粉をまともに吸い込んだルクスルナの全身がガクガクと痙攣を始めた。  
先ほど与えられていたより直接的で激しい性感作用が、今の粉によって与えられたのだ。

今度は腰だけでなく、手も足も暴れて、喉を逸らしてのけ反った。  
ぷし、ぷしやああとまたイキ潮が我慢できずにばらまかれる。  
絶頂汁を追うようにまた、黄色い小水もプラントの根がある地面に向かっていった。  
装光妖精の絶頂汁と小便には莫大なエネルギーが含まれている。  
それが栄養となり、プラントの根を、葉を、花を育てたのだ。  
そして花はその数を増やし、またルクスルナに性的興奮を与える花粉をまき散らす。  
興奮を覚えたルクスルナの身体は派手に栄養汁をまき散らして再びプラントを育てる。  
すでに負の性的ループが完成しつつあった。

「ふああああ!! らめ、らめええ!!」

糸触手がまた、無慈悲に3つ豆をしごき、速く栄養を己が主に捧げろと催促する。  
性感に堪えられず暴れる身体。その下部から放出される恥ずかしい液体とともにルクスルナの気力は奪われていく。  
それでもまだかまだかとプラントの触手は刺激を与え続けてルクスルナの全てを絞りだそうとする。

「はっふうふうう!!」

生命を挟むかのような触手の催促行為で、ルクスルナはまた絶頂した。  
度重なる性のぶちまけ。  
ルクスルナの意識が遠のいていく。  
閉じゆくまぶたの裏である少女の顔が浮かんた。  
それはあさひの笑顔。ルクスルナの、望月優の1番好きな人。  
閉じかけていたルクスルナの意識が覚醒した。  
ルクスルナは根が身体を拘束している部分だけに光の力を集中させる。  
そしてその力をもって拘束していた根を焼いた。

「はぁっ、はぁ」

「ルナ……」

シェイが真剣なまなざしで、呼吸を整えるルクスルナを見つめてプラントを撫でた。  
またなにか命令を下しているようだ。  
だが、その命令が実行されることはなかった。

「はあああ！！」

ルクスルナが居合の要領で抜刀した青い光剣が、プラントを切り裂いたからだ。  
光の力を集中させた剣が、ライフマテリアを断つ。  
あとにはルクスルナとシェイが残った。

「はっ、はっ……」

ダメージと性的興奮による疲労から膝が笑い、肩で息をするルクスルナ。  
シェイはそんなルクスルナを見てほほ笑んでいった。

「やっぱり私、ルナのこと好き。またね」

シェイは魔法陣を浮かび上がらせるとその中に消えていった。  
シェイがその場からいなくなると同時に夜空も星々の輝きを取り戻していく。

「あっ……」

緊張の糸が解けたルクスルナは地面に尻もちをついて倒れた。

（もしかしたら、あさひもこんな目に……）

とてもつらい戦いだった。望月優という心は、自分の大切な友人も同じようなことになっているかもしれないと思うと胸がぎゅっとしめつけられた。  
明日あさひの様子を見てみよう。そう心に決めて青い光を持つ妖精はその場を後にした。  
。